

# MUSEUM EYES

Mm  
MEIJI UNIVERSITY  
MUSEUM

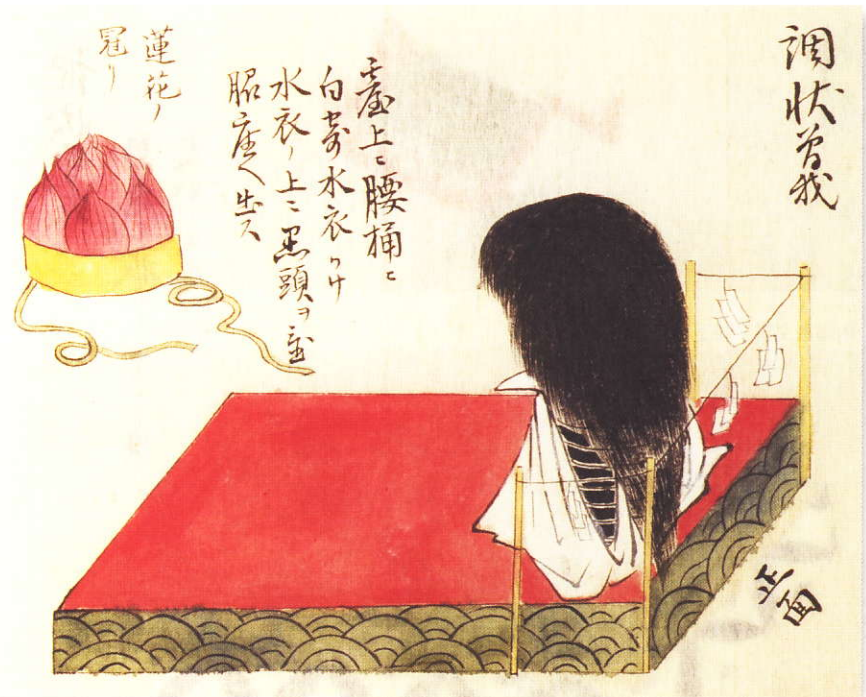


特集  
譜代大名  
内藤家文書の  
魅力

「能楽詩歌等書類 能作物図」 内藤家文書 (2-13-102-03) 譜代大名内藤家文書(当館蔵)は膨大な数の藩政史料からなるが、近代以降の旧藩主家の活動に伴う史料も含まれている。本史料は能舞台の装置を図解したもので、能を受した近代の内藤家の活動をうかがわせる。

## contents

- 博物館ニュース
- 展示&リサーチ  
赤の分析  
—歴史的建造物にみる塗料の使い分け—
- 市民レクチャー  
泉坂下遺跡の人面付土器と再葬墓(上)
- 学芸研究室から  
後期旧石器時代初頭における  
環状ブロック群と現代人の拡散(1)
- 収蔵室から  
裁許留  
—江戸時代の裁判記録からみえてくる村の暮らし—  
多久遺跡群 —多久三年山遺跡の槍先形尖頭器—
- 南山大学協定通信 / 図書室から
- M2カタログ  
大人気! 大塚初重3分スケッチシリーズ第2弾
- 博物館友の会から  
友の会分科会「東アジアの中の古代日本研究会」



# 特集 譜代大名内藤家

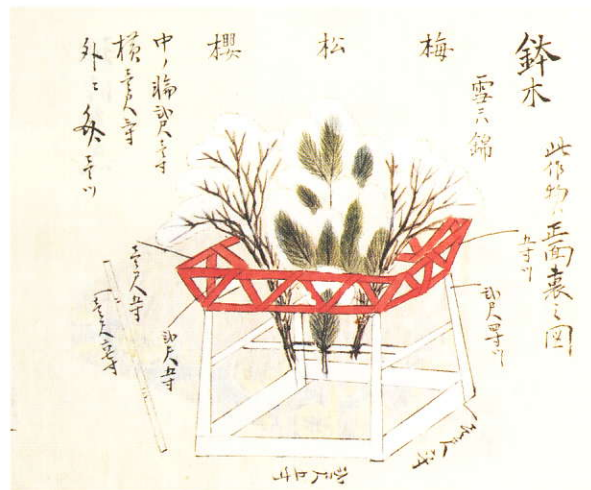
## 内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市

明治大学博物館が所蔵する譜代大名内藤家文書は、江戸時代の藩や近代の旧藩主家を知ることが出来る貴重な史料です。1972年刊行の明治大学内藤家文書研究会編『譜代藩の研究—譜代内藤藩の藩政と藩領』（八木書店）を筆頭に多くの研究成果が生み出されてきましたが、古文書の数には5万点にもものぼり、まだまだ取り上げられていない史料が沢山あります。

2005年からは未整理であった近代史料の整理に着手し、明治大学文学部教授落合弘樹氏、租税資料館研究調査員牛米努氏、落合ゼミの学生院生の協力により無事整理を終える事ができました。江戸時代の内藤藩の史料の良質さは、言うまでもありませんが、近代史料もまた地域社会において旧藩主家がどのような役割をはたしているかを私たちに教えてくれる貴重な史料である事が分かってきました。

内藤家文書を如何に活用するか、一層の利用促進が期待される中、2011年から内藤家文書の研究促進と研究成果の地域還元を目的としたプロジェクトが開始される事になりました。その内容は大きく二つ。一つ目の課題は、内藤家文書の研究促進です。単なる統治組織としての側面のみではなく、地域社会との関係、文化芸能への影響、近代への連続性などを視野にいたした内藤藩の研究を目標に、5年間にわたり史料調査、分析、成果報告を行っていきます。二つ目は、内藤家文書研究の成果を地域社会に還元する事です。かつて内藤藩が存在し、内藤家の大名道具を所蔵する宮崎県延岡市とは史料の相互提供や講演会の開催など、これまでも交流を重ねてきました。内藤家文書研究の成果を地域社会に還元すべく、2011年から3年間、重点的に交流を進めていく事になりました。

一つ目の課題について、今年は延岡市内藤記念館の協力を得て、能などの文芸関係史料、藩と儀礼の関係を示す史料、それらの前提となる内藤藩の特徴を示す史料の所在調査を行いました。表紙と本頁左の彩色図はその際調査を行った「能楽詩歌等書類 能作物図」（内藤家文書2-13-102-03）です。内藤家には江戸時代以来の能面が伝わりますが、能を好んだ内藤藩十五代当主政義は、明治以降さらに能道具類を蒐集し、すばらしい能面のコレクションを形成しました。この能面の



内藤家文書 海上の図



# 文書の魅力

## との交流事業はじまる!!

コレクションは現在延岡市内藤記念館に所蔵されています。

二つ目の課題については、7月5日に延岡市でアウトリーチ活動（出前授業と講演会）を行いました。

出前授業では、博物館の学芸員が延岡市南方中学校を訪問し、内藤家文書の延岡関係絵図を教材に授業を行いました（写真本頁右上）。その際に教材としたのが、見開き下部の図「海上の図」（内藤家文書増補追加目録5、88番）と本頁右の「日向国臼杵郡絵図」（内藤家文書3-23-11-36-33）です。「海上の図」は大坂から延岡までの航路を描いたもので、航路を中心軸に海岸の様子が描かれています。内藤藩は参勤交代などで江戸に向かう際には、海路で大坂に向かいました。このためにこの図を描かせたのでしょうか。内藤藩は、延享四（1747）年に磐城平から延岡に領知を移され、同藩の所領は三箇所に分散する事になりました。「日向国臼杵郡絵図」は城郭のあった延岡地域の絵図です。

明治大学博物館と延岡市教育委員会の共同主催で行われた講演会では、落合弘樹教授と博物館の学芸員が講演をしました（写真本頁下）。多くの延岡市民で会場は満員となり、内藤家文書を活用した講演内容は好評を頂きました。



## ❖ ふるさとの歴史を調べて明治大学に行こう！作文コンテスト

明治大学博物館から研究成果を還元するために地域に出向くだけでなく、地域の子供達にも明治大学で活動してもらおうという事で、プロジェクトの二つ目の課題、旧領との交流事業として、地域の歴史を調べ紹介する「ふるさとの歴史を調べて明治大学に行こう！作文コンテスト」を開催しました。

### 明治大学博物館 主催 ふるさとの歴史を調べて 明治大学に行こう！ 作文コンテスト

#### ◆ テーマ 「私のふるさと歴史自慢」

東京の明治大学博物館に、宮崎県の歴史に深くかかわるたくさんの古文書があるのを知っていますか。博物館ではそれらの古文書から分かった様々な歴史を、講演会活動などを通じて皆さんにお伝えしてきました。今度はみなさんが地域の歴史をしらべて、私たちに教えてくださいませんか。あなたの住んでいるところにはどのような歴史がありますか。あなたはその歴史をどんな風に感じていますか。あなたの『ふるさと歴史自慢』を待っています。

#### ◆ 応募要項

1. 応募資格 宮崎県延岡市内の小学生・中学生、宮崎県内の高校生
2. 800字(400字詰原稿用紙2枚)程度、ワープロ原稿可
3. 作品には表紙をつけて ①タイトル ②氏名(フリガナ)③所属学校名学年を明記して下さい。
4. 応募作品は自作、未発表のものに限ります。応募作品は返却しません。応募作品の著作権は主催者に帰属します。
5. 提出日 2011年9月1日 所属学校に提出

#### ◆ 各賞

高校生 優秀賞 1名、入選 2名  
中学生 優秀賞 1名、入選 2名  
小学生 優秀賞 1名、入選 2名



## 受賞者 発表!!

■小学校の部	優秀賞	延岡市立北浦小学校五年	佐藤夏紀さん
	入選	延岡市立旭小学校六年	小野隼弥さん
	入選	延岡市立黒岩小学校六年	小田原海さん
■中学校の部	優秀賞	延岡市立岡富中学校三年	末廣つぐみさん
	入選	延岡市立恒富中学校二年	今村晴菜さん
	入選	延岡市立北方中学校二年	菅原岳史さん
■高校生の部	優秀賞	宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校四年(高校一年)	沼勁太郎さん
	入選	宮崎県立高城高等学校二年	柏田大貴さん
	入選	宮崎県立飯野高等学校二年	谷口千香子さん

作文コンテストの受賞者は、10月16日(日)に明治大学を訪問、授賞式に出席すると共に、優秀賞獲得者の作文発表が行われる予定です。授賞式の模様は次回ミュージアム・アイズにてご紹介します。

## ◎ 博物館ニュース

### 2011年度 明治大学博物館特別展

#### 「漆器 JAPANWARE—文理融合型研究から見てきた 漆の過去・現在・未来—」を開催

例年よりは4ヶ月ばかり早い、6月18日(土)から7月31日(日)までの44日間にわたり本年度の特別展が開催され、3515名の入場者を得ました。理工学部応用化学科の宮腰哲雄教授による漆の科学分析や新しい漆の開発、文学部史学地理学科の阿部芳郎教授による縄文時代の漆器研究、そして博物館商品部門によって1950年代後半頃から始められた漆器製品の収集と調査研究の成果公開という、明治大学として、また、大学博物館として特色的な展覧会となりました。この展示は、「漆とは何か?」という基本的かつ広範にわたるテーマをコンパクトに提示するという欲張りな企画となりました。漆の物質としての特性、使用の始まり、世界的な漆文化の広がり、現代における漆器利用の現状、次世代の工業原料としての可能性など、これまでの古美術を中心とする漆器展とはまた異なった視角から、漆と漆器の素顔を紹介することができました。展覧会は閉幕しましたが、その展示内容は特別展図録に収録され、引き続き博物館受付で頒布中です(頒価1300円)。



#### 明治大学創立130周年記念 明治大学 大ミュージアム月間 スタンプラリー開催!

明治大学には、博物館・資料館・ギャラリーなど研究成果や学術資料の公開、教育を目的とした数多くの展示施設があります。今秋、明治大学創立130周年記念事業の開催にあわせ「明治大学 大ミュージアム月間」と題して各施設をめぐるスタンプラリーを行います。ぜひこの機会に身近で公開されている明治大学の知の財産を探究してください。各展示施設に備え付けのオリジナルスタンプを5個以上集めると、130周年オリジナルグッズをプレゼントいたします。

実施期間：2011年10月8日(土)～12月18日(日)

参加施設：明治大学博物館・大史学展示室(明治大学博物館内)・阿久悠記念館(アカデミーコモン地下1階)・中央図書館ギャラリー・米沢嘉博記念図書館・平和教育登戸研究所資料館(生田キャンパス)・生田図書館 Gallery ZERO

グッズ引き換え場所：●駿河台キャンパス/明治大学博物館受付(月～土、10:00～17:00)

●生田キャンパス/平和教育登戸研究所資料館受付(水～土、10:00～16:00)

グッズ引き換え期間：2011年10月11日(火)～12月22日(木) ※なくなり次第終了

#### 博物館所蔵萩原龍夫旧蔵資料を主題としたシンポジウムが本になりました

1967年から1985年に明治大学文学部教授を勤めた故萩原龍夫氏の遺した各種の研究資料—萩原龍夫旧蔵資料は2008年2月から博物館で整理・目録化が進められてきました。2009年3月からは、本資料の研究・活用を目指して萩原龍夫旧蔵資料研究会も立ち上げられ、2010年10月17日にシンポジウム「村落・祭祀研究の現在—萩原龍夫・宮座研究とその継承をめぐって—」が開催されました。シンポジウムには多くの研究者が参加し、熱い議論がかわされました。好評を得たこのシンポジウムがこの度、萩原龍夫旧蔵資料研究会編「村落・宮座研究の継承と展開」(岩田書院)として出版されました。なお、萩原龍夫旧蔵資料は整理を終え、2011年度から仮目録にて閲覧公開を行っています。



# 赤の分析

## —歴史的建造物にみる塗料の使い分け—

本多 貴之 (理工学部専任講師)

漆は日本を代表する伝統文化であり、縄文時代から今に至るまで数々の美術品や建造物が文化財に指定されている。過去の作品を科学の目から分析することで、その作品や道具を作った人々が「何を目的として作ったのか?」という事が明らかになることは非常に多い。私が主として漆の分析に利用している分析手法が「熱分解—ガスクロマトグラフィー/質量分析」という手法である。おおよそ1mg程度の分析試料(サンプル)をヘリウム環境下で500°Cに加熱しガス化した試料を分析する手法である。この手法は、塗料や成形物など硬くなってしまった試料であっても分析が可能のため、ここ数年文化財の分析手法として日本国内外で利用されることが増えてきている[1-3]。

私がこれまでに手がけた研究の一例と



日光東照宮上神庫の外観

して、明治大学130周年を記念しての“漆器”の展示では埼玉県川口市の石神貝塚の例を紹介した。石神貝塚の例では縄文時代においても、赤い漆塗りをよりきれいに行うために赤の元となる<sup>ぶんから</sup>粒の大きさを使い分けていた可能性が指摘されるなど興味深い結果が得られている。

同じ「赤」を使った事例として、栃木県日光東照宮の分析事例を紹介する。日光東照宮は江戸時代に徳川家康を祀る目的で建立された神社であり、本殿を始め建物の多くは国宝や重要文化財に指定されている。日光東照宮は建立当時、幕府直轄の建物であったこともあり、建物の改修や建て替えに際してはその子細が記録されている。そのため、建物自体の歴史もさることながら、技術の変遷や改修の周期を知る事が可能な面からも貴重な建

物である。  
この日光東照宮のなかに「<sup>かみじんこ</sup>上神庫」(図1)と呼ばれる赤色に塗装された建物がある(上神庫は例祭などに用いられる神具を保管しておくための建物である)。今回分析に用いている上神庫の試料は、1999年から4年間かけて行われた塗装修理に伴い出てきた、日光東照宮の元和創建期もしくは寛永造替期の物と思われる試料である。日光東照宮の本殿はこれまでに度々分析が行われており、漆を用いて塗装されていることが知られている。一方、「倉庫に相当する上神庫はいつい何で赤色に塗られているのか?」について分析を行うと、漆は使われているがメインとなる成分は漆ではなく乾性油と呼ばれる植物油であることがわかった(図2)。乾性油は亜麻仁油や桐油など空气中に放置すると固まる油の総称であり、漆に混ぜることでより高い光沢になる(朱合漆や塗り立て漆と呼ばれる)ことも知られている。しかし、上神庫の場合には朱合漆よりもさらに油の量が多く、油に若干の漆を混ぜた程度の割合であった。これらのことから、江戸時代の人々は、建物の重要性に合わせて価格の異なる塗料を使っていたということが明らかになった[4]。

これらの分析結果は科学技術の進歩により、より少ない量の試料であっても正確に分析出来るようになったことの影響が大きい。特に、有機物(主に、燃やしたときに炭や灰になる物質)分析分野の技術

革新は大きく、クロスセクション(断面)に応用できる分析技術なども増加している。これらの分析手法を組み合わせることで、当時の人々が何を材料とし、どのような工夫を加え利用しているのかを明らかにすることが可能である。今後は、昔の技術の再現やその良さを生かした新製品の開発などが期待されている。

【参考文献】

1. Sarah Fezzey, Ruth Ann Armitage, Pyrolysis GC-MS and THM-GC-MS studies of a black coating from Little Lost River Cave, Idaho, J. Anal. Appl. Pyrolysis, 77, 102-110 (2006)
2. Rong Lu, Xiaomin Ma, Yukio Kamiya, Takayuki Honda, Yoshimi Kamiya, Aki Okamoto, Tetsuo Miyakoshi, Identification of Ryukyuu lacquerware by pyrolysis-gas chromatography/mass spectrometry, J. Anal. Appl. Pyrolysis, 80, 101-110 (2007)
3. Takayuki Honda, Rong Lu, Nobuhiko Kitano, Yoshimi Kamiya and Tetsuo Miyakoshi, Applied analysis and identification of ancient lacquer based on pyrolysis-gas chromatography/mass spectrometry, J. App. Polymer Science, 118, 2, 897-901 (2010)
4. 北野信彦、本多貴之、佐藤則武、「初期の日光社寺建造物に使用された赤色塗料に関する調査」、保存科学、No.29、25-44 (2010)

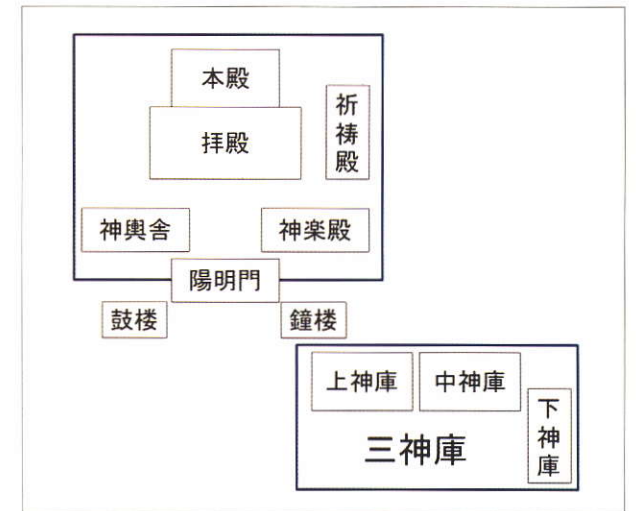


図1 日光東照宮の建物の配置一覧

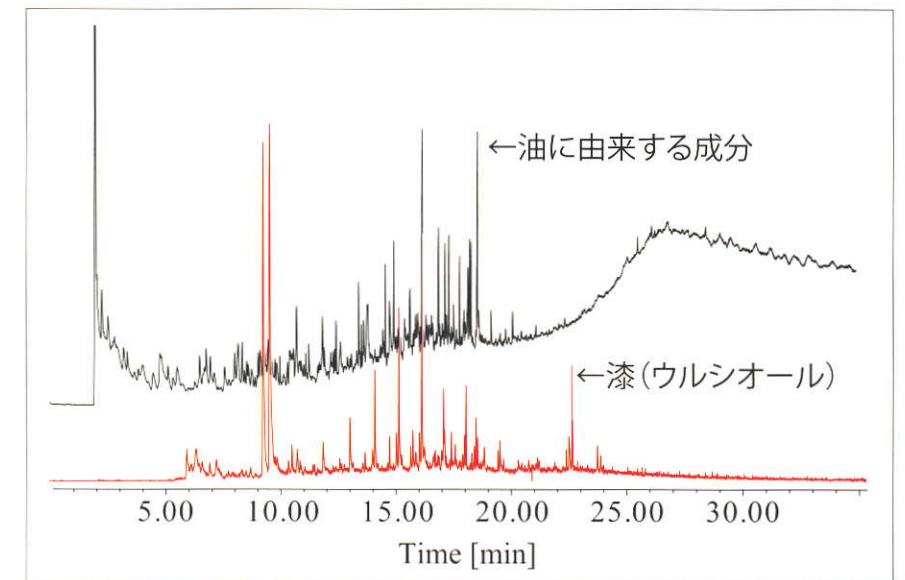


図2 上神庫試料の分析結果



明治大学博物館特別展「漆器」展



漆の科学的分析結果を紹介した

埼玉県川口市石神貝塚の分析結果は『漆器 JAPANWARE —文理融合型研究から見えてきた 漆の過去・現在・未来—』明治大学博物館 2011 に収録されています。

# 泉坂下遺跡の 人面付土器と再葬墓(上)

鈴木 素行 (財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社)



## 1. 人面付土器の出土

2006年1月15日、それは午後2時頃であったと記憶する。調査区の南端部を担当していた小松崎博一さんが近付いてきて、「人面が出ました」と耳打ちされる。足早に向うと、調査区の壁から人面付土器が、文字通りに顔をのぞかせていた。調査に参加していた全員に声を掛ける。現実感に乏しく浮ついた時間に、人は一生のうち幾度出会うことができるのだろう。カメラを手にして足早に戻れば、立ち尽し、あるいはしゃがみ込み、人面付土器を眺める姿があった。稀有な感覚の時間を共有していたと、いま確かに思う。

## 2. 石棒から再葬墓へ

2005年7月16日、『本覚遺跡の研究』

刊行の報告会を催した。本覚遺跡<sup>ほんかく</sup>というのは、茨城県の常陸太田市にある遺跡で、縄文時代晩期に石棒が製作されていた痕跡を求めて、2001年に発掘調査を実施した。これも、休日を利用しての学術調査である。その調査に参加した者たちが久しぶりに集い、開放感を酔いが助長する。記憶は定かでないものの、常陸大宮市にある泉坂下遺跡<sup>いずみさかした</sup>の発掘調査は、この時に決意らしきものが表明されたという。それは、あくまで石棒製作の追及を考えての発言であった。

調査の実現には、常陸大宮市歴史民俗資料館に勤める石井聖子さんの奔走があった。10日も経たないうちに、地権者の菊池栄一さんへの仲介があり、菊池さんに、遺物を採取した経緯を現地で説明

していただくことになった。石棒の未成品は、遺跡の広い範囲から拾い集めたものであるという。一方、弥生時代の壺形土器を掘り出した地点について、菊池さんの記憶は鮮明であった。この時から、発掘調査は、再葬墓の確認へと大きく傾き始めることになる。

## 3. 再葬墓と人面付土器

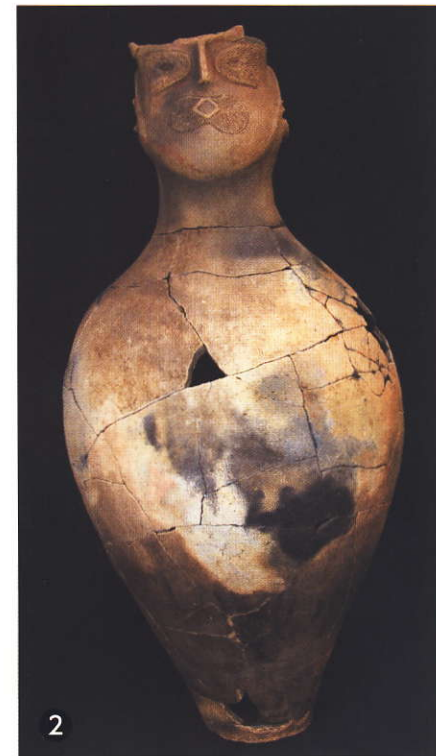
2005年12月25日、常陸大宮市歴史民俗資料館において、泉坂下遺跡発掘調査の事前説明会を開いた。参加者に、いままでの経緯、発掘調査の目的と方法等を説明する。最後に、「人面付土器を掘ろう」と呼びかけた。泉坂下遺跡と同じ久慈川流域<sup>ひさごがわ</sup>では海後遺跡、同じ常陸大宮市内では那珂川流域<sup>なかがわ</sup>の小野天神前遺跡<sup>おのてんぜん</sup>においても、人面付土器が再葬墓から出土したことが知られている。したがって、決して有り得ないことではないのだが、まさかと思いがちの景気付けであり、それを見透かされてか、参加者に反応は無い。ところが、調査の初日にいきなり、人面付土器が出土したのである。

## 4. 泉坂下遺跡の人面付土器

予言が的中したこと、それが初日であったことにも増して、泉坂下遺跡に出現した人面付土器の造形は意表を突くものであった。漠然と思い描いていたのは、海後遺跡や小野天神前遺跡の人面付土器の姿である。これらは、壺形土器の口

頸部に、かなり記号化した目耳鼻口の部品を貼り付けて顔面が構成される。顎から耳に至る顔の輪郭は、隆帯と呼ばれる紐状の隆起だけで表現されている。部品を貼り付けることは同じでも、泉坂下遺跡の人面付土器は、顎が突き出て頬が膨らみ、埴輪を連想させるような立体的な造形なのであった。膨らみは後頭部にも及び、側面は横顔、背面からも後姿であることが窺える。これには、「瓢形」と呼ばれる、ヒョウタンのような形態の壺形土器を成形する技術が応用されている。部分的に赤色の顔料が付着して残り、元の顔面は全体に赤く塗られていたらしい。

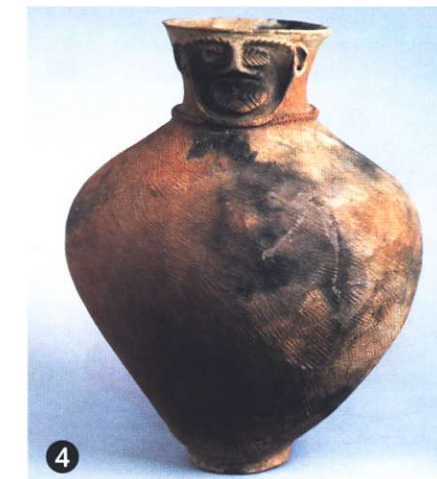
人面付土器が出土した土坑を第1号墓壙と呼び、調査区を拡張して土坑の全体を掘り進める。土坑内には、人面付土器を含めて4個体の壺形土器が埋設されていた。人面付土器の全体も露出して、



②の左側面(左)と後部(右)

底部までほぼ完全な状態で残されていることが明らかとなった。胴部が縦に長いことも、海後遺跡や小野天神前遺跡とは異なっていた。頸部から胴部へ移行する曲線は撫で肩で、全体として五頭身ほどの人体という印象である。顔面を構成する部品の表現や、長い胴部の形態には、筑西市<sup>つくし</sup>の方遺跡<sup>かた</sup>の人面付土器に共通した特徴を認める。

実は、泉坂下遺跡の人面付土器の胴部は断面が楕円形、その長軸が人面に対応して正面を向くので、人体を意識したものかとも考えていた。しかし、後に女方遺跡<sup>おんなかた</sup>の人面付土器を観察してみると、胴部の断面は楕円形でも、その短軸が正面を向いており、人体を意識した成形という考えは棄却することにした。ちなみに、女方遺跡の顎に突出して貼り付けられた隆帯は、一見すると顎ひげのようで、人面付



土器は男性を表現したものと即断されてしまうこともあるだが、泉坂下遺跡と見比べてみれば、これは、突き出た顎を表現した記号であることが容易に理解できるのである。

人面が付属する土器は、弥生時代の各地で発見されている。その中で、茨城県北部の久慈川・那珂川流域、茨城県西部から栃木県東部にかかる鬼怒川流域は、それが大型の壺形土器ということに特徴を指摘できる。接合して復元された泉坂下遺跡の人面付土器は77.7cmの高さとなった。女方遺跡の68.5cmを上回り、現在までに知られた完形品の中では、最も大きな人面付土器である。しかしなによりも、再葬墓に埋設されていた状況の詳細が記録されたことに、考古学的な価値が認められるものとなるだろう。



① 泉坂下遺跡 人面付土器出土状況  
② 泉坂下遺跡 人面付土器  
③ 海後遺跡 人面付土器 (茨城県立歴史館所蔵)  
④ 小野天神前遺跡 人面付土器 (茨城県立歴史館所蔵)  
⑤ 女方遺跡 人面付土器 (東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives)

# 後期旧石器時代初頭における 環状ブロック群と現代人の拡散(1)

島田 和高 (考古部門学芸員)

## はじめに

本紙54号「学芸研究室から」(2010年)に掲載したように、日本列島には約4万年から3万8千年前の間に明らかなヒトの活動痕跡(石器群)が各地に残され、急激に増加するようになる。この現象の背景には、遠くアフリカに起源をもつ現代人(ホモ・サピエンス)の拡散と移住の波が、日本列島に到達したことがあると考えられる。このことは、山岳部(例えば信州霧ヶ峰・八ヶ岳)や海上(神津島)にある黒曜石原産地と黒曜石が、開発され利用されることからうかがい知ることができる。世界史的に見れば後期旧石器時代(the Upper Palaeolithic)のはじまりといつてよい。

ところで、列島に到達した現代人は、その後、どのように生活物資を獲得し、社会を営んでいたのか。このことは、現代人に

よる列島定着の歴史を復元するうえで重要な問いを投げかける。この問題へのアプローチの一つとして、「環状ブロック群」「環状ユニット」あるいは「環状のムラ」と呼ばれる特異な集落景観を観察することにしよう(島田2011)。

## 1. 環状ブロック群とは

環状ブロック群とは文字通り、径数メートルのブロック(石器集中部:ほぼ全ての遺跡にみられる石器製作跡)が径十数メートルの略円環状に分布している旧石器時代遺跡を指している。円環部の内側あるいは外側に接してブロックが分布することも多い。他の遺跡と比べて、ブロック配置の規格性がとても高い。環状ブロック群が最初に注意されたのは群馬県下触牛伏遺跡(1986年)であり、その後現在まで、東日本を中心に100基前後が確

認されている(橋本2006)。その数は、発掘により増え続けている。ここで簡単に、他の遺跡には見られない環状ブロック群の特徴を次の3点で示しておこう。1. 環状に配置されているブロックの相互に石器の接合関係が認められる頻度が高い。2. 存続期間が後期旧石器時代前半期に限定される。3. 局部磨製石斧を伴う。最初の特徴は、複数あるブロックが一定の生活(滞在)期間にほぼ同時に形成されていたことを示し、仮に個々のブロックがイエの存在を反映していれば、円環状にイエが建ち並ぶ集落の景観を想定することができる。次の特徴は、関東ローム最上部の立川ローム層第2黒色帯(約3万5千年~3万年前)に出土がほぼ限定されていることをいう。つまり環状ブロック群という集落景観は、はじまり(出現)とおわり(消滅)がはっきりしているのだ。最後の特

徴は、局部磨製石斧が環状ブロック群と共に消滅することを考え合わせると、環状ブロック群における生業活動に密接に結びついていた石器であったことを物語る。

## 2. 環状ブロック群の種類

環状ブロック群は規格性が高いためムラそのものを分類することができる。そこで関東平野に分布する37の環状ブロック群について、次の5つの属性を観察した。1. 環状部の東西径と南北径の平均(東西/南北平均径:測定にはある程度の曖昧さが伴い、また一部に推定を含む)。2. ブロックの配置に関する諸特徴。3. 石器群組成数。4. 個別の環状ブロック群におけるブロック数。なお、ブロックの規模(石器点数)は、便宜的に1~59点(<60ブロック)、60~149点(>60ブロック)、150~299点(>150ブロック)、300点以上(>300ブロック)の4つに区分する。5. 主要石器の組成および技術的特徴。これら5つの属性を比較することで、37基の環状ブロック群を4つの主要な範疇(グレード)に区分することができた(図1~5)。

①グレード1(図1:小形環状ブロック群)とグレード2(図2:中形環状ブロック群)の違いは、>60ブロックの増減(前者

が遺跡あたり1基程度、後者が2~4基程度)という変動によって表すことができる。両者における>60ブロックは、遺跡における中核的な石器製作場所であり、これらの増減の評価が、両者の関係において重要である。なお、両者は標本数の68%(N=25/37)を占めているので、最も一般的な環状ブロック群を代表している。

②グレード3(図3:中形環状ブロック群)は、基本的なブロック群の配置と規模において、グレード2を踏襲しているが、石器群組成数がグレード2と比較して非線形的に増大している。高密度なグレード3の遺物分布は、明らかに>150ブロックおよび>300ブロックの存在、すなわち相対的に累積度の高い石器製作残滓の廃棄によって生じたと理解できる。また、黒曜石消費に特化している埼玉県清河寺前原遺跡(黒曜石1,293点/1,472点中)、通常数点にとどまる局部磨製石斧の組成が例外的に豊富な東京都野水遺跡、神奈川県津久井城跡馬込地区遺跡など、グレード3は、環状ブロック群全体の中でも質・量双方の側面でもより集中的に石器製作へ労働力が投下されている。

③グレード4(図4:大形環状ブロック群)の特徴は、最大のブロック群配置規

模によって示される。ところが、グレード4を構成しているブロックは、>60および<60ブロックを主体としており、グレード2と共通している。グレード4は、東西/南北平均径において最大の一群であるが、個々のブロックの規模と組み合わせにおいては、グレード1や2と同等である。グレード4の集落景観および複雑で独特なブロック群の円弧状の配置は、グレード1・2・3に対する非線形的なブロック数の純増によって引き起こされている。

次回、4つのグレードに区分された環状ブロック群の相互の関係と現代人の列島定着過程について、述べていきたい。

## 【参考文献】

- ・島田和高 2011 「後期旧石器時代前半期における環状ブロック群の多様性と現代人の拡散」『資源環境と人類』1号, pp.9-26. 明治大学黒曜石研究センター
- ・橋本勝雄 1989 「AT降灰以前における特殊な遺物分布の様相」『考古学ジャーナル』309, pp.25-32. ニューサイエンス社
- ・橋本勝雄 1993 「環状ユニット(環状ブロック群)の全国分布とその意義」『環状ブロック群—岩宿時代の集落の実像にせまる—予稿集』, pp.28-29. 岩宿フォーラム実行委員会
- ・橋本勝雄 2004 「後期旧石器時代前半期の石斧に関する一考察」『印旛都市文化財センター紀要』3, pp.1-27. 印旛都市文化財センター
- ・橋本勝雄 2006 「環状ユニットと石斧の関わり」『旧石器研究』2, pp.35-46. 日本旧石器学会

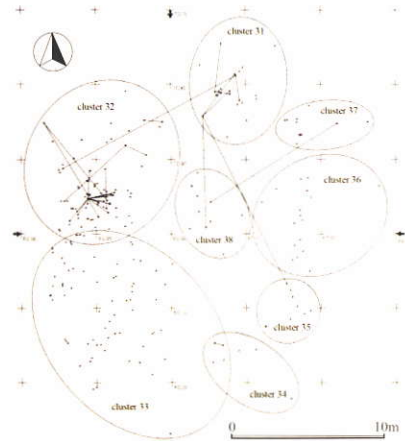


図1 環状ブロック群グレード1:千葉県東峰御幸畑西第1文化層エリア3(宮・麻生ほか2000)

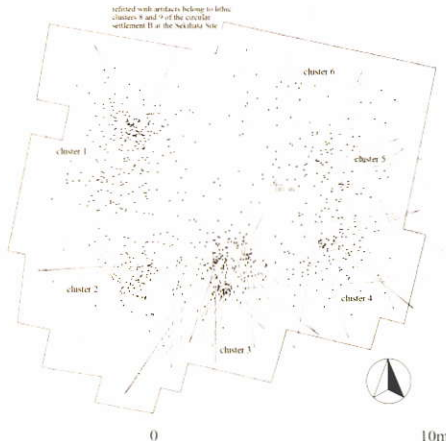


図2 環状ブロック群グレード2:千葉県関畑1a文化層Aユニット(小久貴・新田2004)

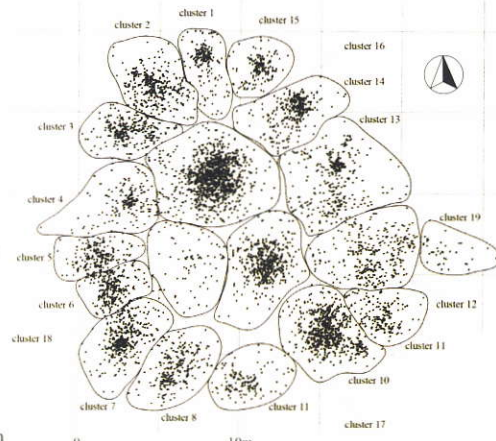


図3 環状ブロック群グレード3:東京都野水第IV文化層(川辺・橋本ほか2006)



図4 環状ブロック群グレード4:栃木県上林第2文化層(出居2004)

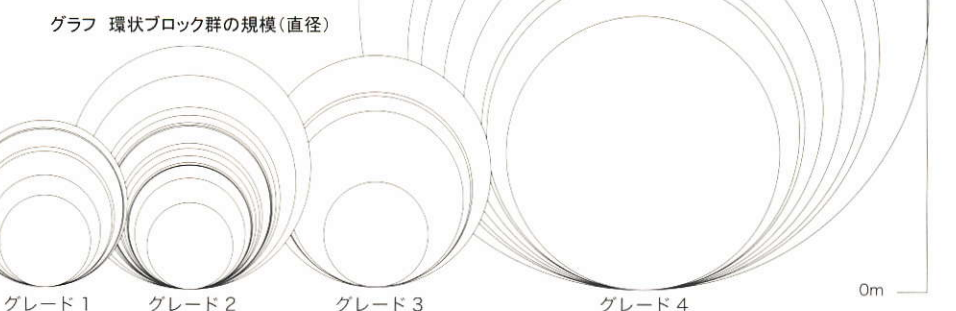
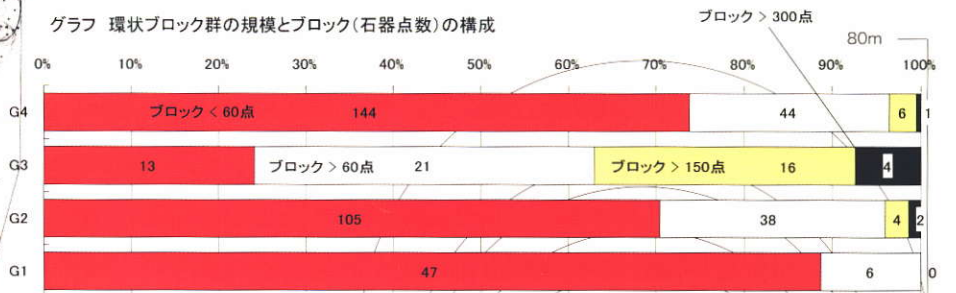


図5 後期旧石器時代初頭の環状ブロック群の種類と成り立ち

## 江戸時代の裁判記録からみえてくる村の暮らし

# さいきよどめ 裁許留

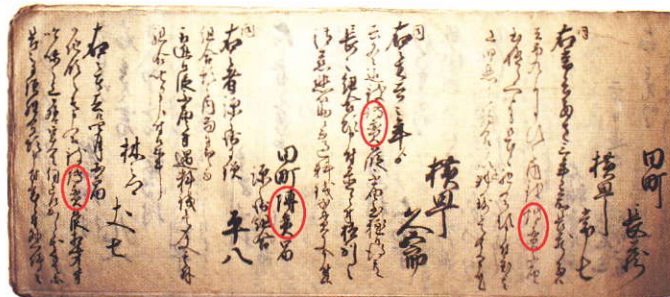
ちいさがた  
小県郡田中組文書より(長野県)  
『明治大学刑事博物館目録』34号-S-1)



当館刑事部門では、人権の尊重に改めて理解を深めていただきたく、江戸時代の刑罰を体系的に展示紹介しています。そこで今回は、村での裁判を記録した信州小県郡田中組文書所収『裁許留』をとりあげ、より日常的な刑罰の姿とそこに垣間見える村の暮らしを紹介します。文書名の田中組とは、上田藩所領小県郡内の19ヶ村で構成された行政区の一つで、「組」には「割番」とよばれる役職が置かれ、有力農民がその任につき藩側の代官と共に郡方統治を担っています。田中組文書はこの「割番」を勤めた細田家に伝存した史料群です。

『裁許留』は江戸後期から幕末までの裁判記録ですが、年代ごとに分冊され全部で6冊収蔵されており、今回とりあげるものは寛政6年～文化14年(1794～1817)の第一冊目です。厚さ10cm近いこの横帳は、小県郡内で下された裁きに関して処罰対象人物の所属町村・名前・月日から始まり、事件の経緯と処罰が記されています。その内容は多種多様で、他村の柴を勝手に伐った者が過料銭壹貫文(罰金刑)とされたり、酒乱で雑言を吐いて騒いだ者が二十日手鎖の処分を受けたり、衣類雑物六品盗んだ者が追放刑に処せられたりといった、当時の日常に起こった事件・処罰が記録されています。さらには、連座制(他人の罪に関し連帯責任を問われ罰せられること)の厳格さが目立ち、子供の罪に関しては親も処罰され、大人が犯した罪でも村を管理する庄屋・組頭や、互助・監視義務のある五人組などが監督不行き届きで罰せられ、なかには弟子の不始末で寺が叱りを受けた事例もあり、連座制による処罰は事例数の半分近くにも及びます。

さて、数ある事例の中でも頻繁に登場するのが「博奕」(博打)です。博打は、幕府も度々お触れで厳禁と通達していましたが密かに行われ、『裁許留』でも毎年多くの者が処罰されたことを伝えています。史料内では、無宿者(いわゆる戸籍をもたない者)を集めて行ったり、組合・隣家の連中4、5人で集まり博打をしていたり、場所も長屋・水車屋・宿場などで行われています。違反者は、手鎖・組合預・過料銭五貫文・追放・居村払などの処罰を受けましたが、中には6度も行った



頻繁に登場する博奕

者もおり常習・再犯者も多く、処罰者の多さからも博打が一部の人間の間では射幸心を強くあおっていたことがうかがえます。現代でも博打は犯罪とされ、当時でも違法性の認識があったと思われるが、こうした博打に興ずる姿も村の暮らしの一端といえます。さらには、『裁許留』はより娯楽に直結した興味深い事例をも我々に伝えています。

「上ヶ沢村沢政五郎倅浅吉 居宅ニ而十二人之者申合踊いたし(中略)近村より見物人も数多集り候程之義重々不届ニ付村払申付」

〈上ヶ沢村政五郎の息子浅吉は、自宅で12人と集まって踊り(中略)近村より見物人が多数集り、重大な過失であり村払に処する〉

上ヶ沢村の浅吉は、踊りの許可を得ず若者たち12人で踊狂言を行い村払(村から追放刑)の処罰を受け、他の若者11名は過料銭二貫文ずつ、庄屋・組頭は二十日押込(昼夜の出入り通信を禁じる刑)、若者たちの親も叱りを受けています。また、同年10月には鈴子村で23人、下ノ条村では32人、海善寺村でも15人が、熊野権現祭りや八幡社内での踊狂言を理由にそれぞれ過料などの処罰を受けています。江戸時代、こうした踊狂言は御制禁とされていましたが、『裁許留』を見る限り上田藩では踊りの許可をとった上で行われていたようです。さらに目を通してみると、踊りに加えて唄を歌い、三味線を弾き、その上花火を楽しんだ記述もあります。そこには、処罰を受けると分かっている、踊り狂言の稽古をしてまで本番当日を心待ちにし、許可が下りなくても踊り合い、それを楽しみに人々が見物に集まるといった、村人の姿と息が鮮やかに浮かんできます。

『裁許留』は、作成当時は単に裁判・処罰の記録でしかありませんでしたが、今では上記のような当時の村の暮らしの一端をも我々に映し出してくれる好史料です。また、ここでとりあげなかった他の5冊の『裁許留』にも、後世を生きる我々に江戸時代の村の暮らしを伝える興味深い事例が眠っていることでしょう。

(小野 孝太郎)

# 多久遺跡群

## — 多久三年山遺跡の槍先形尖頭器 —

1960(昭和35)年、日本考古学協会が組織した西北九州総合調査特別委員会のもとに、明治大学考古学研究室によって旧石器時代の多久三年山・茶園原両遺跡の学術調査が行われました。そこでは、大形の槍先形尖頭器が多く出土しています。

多久遺跡群は、佐賀県多久市に位置し40ヶ所余りの遺跡があります。そのうち多久三年山遺跡は、黒色で緻密な安山岩であるサスカハが産出される鬼ノ鼻山の北麓にあります。九州で獲得できる主な石材は黒曜石で、各地で産出されますが、サスカハの原産地は九州では佐賀県多久市に限られます。出土資料は、槍先形尖頭器186点、削器112点、船底形石器11点、搔器1点、石核48点、剥片および碎片18,653点で、石器群の主体は、槍先形尖頭器の折損品・未成品・調整剥片などです。

出土した槍先形尖頭器はA類・B類・C類の三つに分類されています。

〈A類〉素材は縦長剥片用石核から剥離した縦長剥片を使用したと思われ、先端を尖らせ根元には薄い剥離面を残して仕上げられており、石器の側辺が平行し整った形をしています。剥片の先端部に、縦長剥片用石核から剥離したときにみられる剥離面の内側のくぼみがみられないため、横長剥片から仕上げられている可能性もあります。石材は全てサスカハで、総数16点のうち、最大のは長さ21cm、幅5.3cm、厚さ1.9cmです。



多久三年山遺跡の遠景

〈B類〉素材は横長剥片用石核から剥離した横長剥片を使用しており、根元には調整剥離と思われる剥離痕が残されていることが多い。素材に横長剥片を使用しているため、バルブ(打瘤)と呼ばれる瘤が剥片の一面の中央に残っており、器体両側の縁辺は平行していません。本類も石材は全てサスカハで、総数166点で出土した尖頭器のほとんどを占めます。最大のは長さ22cm、幅5.1cm、厚さ1.6cmです。



多久三年山遺跡出土槍先形尖頭器(B類)

〈C類〉本類は木葉形をしています。素材に使用されている剥片が縦長剥片か横長剥片かは明らかではありません。総数4点とごくわずかで、石材は2点がサスカハでもう2点が黒曜石です。最大のもので、長さ6.3cm、幅4.2cm、厚さ1.1cmと小形で、槍先とするには異論があるとされています。

多久三年山遺跡の石器群は、ほとんどがB類の両面調整による大形の槍先形尖頭器で、横長剥片を素材としています。多久遺跡群の中でみても多久茶園原遺跡のものは左右対称で整っているため、このように横長剥片を多用した多久三年山遺跡の槍先形尖頭器は特徴的です。槍先形尖頭器をはじめ石器の製作に使用する原石は、黒曜石やサスカハならどれでも加工に向くわけではありません。多久三年山遺跡から出土した槍先形尖頭器は、緻密で加工しやすい原石を用いており、多久の旧石器時代人は石の性質を見抜いていたと思われる。

多久三年山遺跡は九州旧石器研究の最初期に本格的な調査が行なわれた遺跡の一つで、サスカハ原産地における石器製作址として重要な遺跡であり、大形の槍先形尖頭器は個性的な性格を持った資料といえます。

(古豊 裕次朗)

### 【参考文献】

- ・安藤政雄・島田和高 2000 『群馬県岩宿遺跡発掘50周年記念 岩宿発掘50年—旧石器時代研究の原点と足跡—』 明治大学考古学博物館
- ・杉原荘介・戸沢充則・安藤政雄 1983 「佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡」『明治大学文学部研究報告』考古学第九冊 明治大学文学部考古学研究室
- ・多久市史編纂委員会 2000 『多久市史』第一巻自然・原始・古代・中世 多久市

## ●南山大学協定通信

### 明治大学博物館・南山大学人類学博物館合同特別展

## 人類史への挑戦 -考古・民族コレクションの系譜-

2012年1月20日(金)~3月10日(土) 入場無料 【会場: 明治大学博物館特別展示室】

明治大学博物館と南山大学人類学博物館は2009年度に「明治大学博物館と南山大学人類学博物館との交流・連携に関する協定書」を取り交わし、2010年度から相互の特性を活かした博物館交流事業を展開しています。本特別展は、明治大学を会場として南山大学が所蔵する貴重な考古・民族誌コレクションを一堂に展示し、南山大学人類学博物館の魅力を紹介し、南山大学には、第二次世界大戦後の日本考古学の発展に貢献したジェラード・グロートやヨハネス・マーリンガーにより残された考古コレクションをはじめ、パプア・ニューギニア民族調査により得られたコレクションなどが所蔵されています。明治大学による発掘とその出土品にゆかりのある資料も展示されます。展示期間中には、「文化を集める」という博物館の役割を議論する合同シンポジウムも開催されます。



千葉県姥山貝塚:加曾利E式土器



ニューギニア儀礼用石斧

大須二子山古墳:剣菱形杏葉

大須二子山古墳:衝角付冑

### 主な展示品(予定)

- 南山大学発掘コレクション  
弥生時代、古墳時代を中心とした出土品ほか
- マーリンガー コレクション  
ヨーロッパ旧石器時代の石器ほか
- 日本考古学研究所コレクション  
千葉県花輪台遺跡(縄文早期)・千葉県二ツ木貝塚(縄文前期)・千葉県姥山貝塚(縄文中・後期)・千葉県内出土丸木舟ほか
- タイ、パプア・ニューギニア民族誌資料  
南山大学調査団資料、アウフェンアンガー コレクションほか

(※写真提供: 南山大学人類学博物館)

### 図書室から

図書室からでは、博物館併設の図書室に関することをご紹介します。今回は、地方誌をとりあげます。

博物館図書室の奥には、あまり知られていませんが、日本全国各地の地方誌を集めたコーナーがあります。一歩足を踏み入ると、今まで見たことがなかった地方誌に出会えます。ここにある地方誌は主に、全国の博物館や美術館、岩田書院から寄贈されたものです。内容はもちろんのこと、タイトルだけでも面白いものが沢山あります。

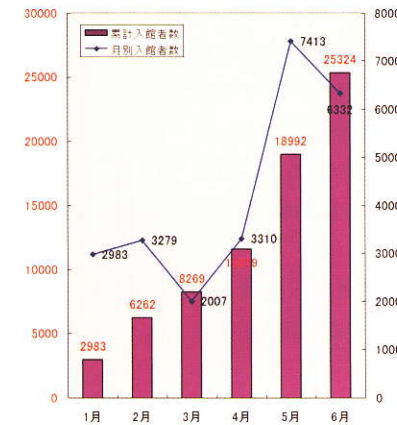
例えば、表も裏も、どのページをめくっても全て児童!!にまつわる話で、とてもインパクトのある『児童通心』、瓦版のようで楽しい『大道芸通信』、タイトルだけ見ると一瞬びっくりしてしまう『クロス』(意味と内容は違います)など、どんな内容なんだろう?と興味をそられるものが沢山あります。この他にも、郷土に密着したもの、考古学関係のものなど、さまざまな内容のものがあります。

残念ながら、これらの地方誌は、OPAC等で検索することが出来ず、博物館図書室でしか出会えません。ぜひ図書室で、お気に入りの一冊を見つけて下さい。

開室時間: 平日・土曜 10:00 ~ 16:30 (日曜、夏季休暇、冬季休暇を除く)

## 博物館入館者数の動き (2011年1月~6月: 延べ人数)

2004年4月以降の総入館者数累計 428,168人



特別展来場者内訳	開催日数	来場者数
3/3 ~ 4/17 新収蔵・収蔵資料展2011 (3/11の震災の影響により、3/12~14・3/18~4/10の27日間は臨時休館)	19日間	1061
4/23 ~ 5/23 吾妻ひでお美少女実験室	31日間	3572
6/18 ~ 7/31 漆器 JAPANWARE-文理融合型研究から 見えてきた漆の過去・現在・未来-	44日間	3515

1月~6月	延べ人数
図書室利用者	1984
講座受講者	680



「漆器」展 内覧会

## 団体見学の記録 2011年1月~6月

- 【一般】 特定非営利活動法人 杉の樹カレッジ (60名)・韓国大邱大学職員訪問団 (10名)・松戸社会見学サークル (30名)・社団法人日本セカンドライフ協会 (13名)・八千代市ふれあい大16期OB会 (25名)・株式会社モアビートプロモーション (10名)・北多摩北地区保護司会 東久留米分区分 (25名)・明治大学校友会 市川地域支部 (22名)・佐倉市民カレッジ11期火曜塾 (28名)・東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課 (40名)・大阪府高齢者大学 歴史考古学科 (32名)・天童市女性農業者県外派遣研修団 (16名)・もえぎの会 (10名)・まち歩きガイドクラブ (60名)・私立大学キャンパスシステム研究会第4分科会 (30名)・日本大連会 (23名)・ドラマティック・カンパニー (11名)・NECユーザー会 (35名)・さいたま市女性経営者クラブ (23名)
- 【小・中学校】 東京都中野区立北中野中学校 (7名)・三郷市立瑞穂中学校 (5名)・私立成城中学校 第2学年 (91名)・獨協中学校 (32名)・糸魚川中学校 (10名)
- 【高等学校】 福岡県立筑紫高等学校 2年生 (42名)・神奈川県立光陵高等学校 3年生 (44名)・藤枝順心高等学校 1年生 (15名)・聖徳学園高等学校 2年生 (87名)・京華商業高等学校 (35名)・国本女子高等学校 第3学年 (77名)・東京都立成瀬高等学校 (30名)・専修大学付属高等学校 (6名)・埼玉県立上尾高等学校 2年生 (64名)・茨進ハイスクール (60名)・東京都立竹台高等学校 (55名)・和洋九段女子高等学校 (32名)・東京都立南平高等学校 2年生 (35名)
- 【大学・大学院・専門学校】 甲南大学法学部森永ゼミ (23名)・明治大学法学部 山本聡ゼミ(犯罪学) (19名)・明治大学法学部専門演習受講生 (6名)・大妻女子大学 (40名)

## M2 カタログ

## 大塚初重3分スケッチシリーズ 第2弾

大人気!

今回ご紹介するのは当館のポストカードの中でも大人気の大塚初重先生3分スケッチシリーズ第2弾です。一枚はシリーズ初の縦形に印刷しました桜井茶白山古墳の古墳内スケッチで、前回のシリーズにはない鮮やかなピンク色が特徴です。もう一枚はこちらもシリーズ初の海外、中国キジール千仏洞のスケッチです。シックな色合いが悠久の時を感じさせてくれます。他にも南方古墳群や大室古墳群など、現在6種類が絶賛発売中です!! またミュージアムショップでは毎月季節にあったディスプレイをしております。5月は鯉のぼりと兜、6月は紫陽花とカエル、7月は七夕飾りなどなど。来て見て楽しいミュージアムショップをつくっていきます。





友の会分科会  
「東アジアの中の古代日本研究会」

友の会の8番目の分科会として、本年7月に「東アジアの中の古代日本研究会」がスタートしました。まだ誕生したばかりで湯気が立っています。

古代日本が、中国文明や朝鮮半島との交流の中で国家形成がされたという視点から勉強をしようと、8人の有志が集いました。まず手探りで研究会を作り、その中で同好の士と語り合う機会を作ろうとスタートさせました。

7月29日に第1回の研究会を開催。まず、参加者を募る案内を友の会の会報に出しました。7月29日に会場の博物館会議室に入ると、初めてみる顔の方が大勢座っておられました。新しい顔が7人。合計15人からのスタートとなりました。同じ志を持った仲間が、このように大勢いたとは嬉しい驚きでした。

冒頭の自己紹介を聞くと、年齢・性別・経験・経歴が異なる多士済々の人達の集まりでした。研究会の第1～2回は助走期間として、韓国の小学校社会科教科書を読み、隣国が自国の歴史をどのように認識し、日本をどのように見ているかを学ぶことにしました。



初顔合わせの、第1回の研究会から出席者の活発な意見が続出。皆それぞれの今日までの勉強の蓄積、関心の角度には違いがありますが、皆臆せずそれぞれの見方や経験からの意見を積極的に述べ合い、研究会終了後に“多くの人の意見を聞くことが、このように有益で楽しいことだったのか”という声も出ました。研究会では多くの個性あふれる意見が聞かれ、まさに歴史を複眼で見られる素晴らしい会です。

なお、第2回の研究会には更に3人の新しい入会者があり、研究会は発足早々から18人のメンバーで、無事船出をすることができました。

今後は、会議室の中の勉強会だけではなく、渡来人の里として有名な高麗神社や、関東近辺の渡来文化の痕跡を残している遺跡巡り等の計画も語られています。数年先には、韓国の遺跡巡りも考えたいと思います。テキストの討論から、フィールドワーク。そして研究者との意見交換など多角的な活動計画を考えています。

## 【友の会 分科会紹介】

- ・古文書を読む会
- ・古文書の基礎を学ぶ会
- ・平成内藤家文書研究会
- ・工芸の会
- ・弥生文化研究会
- ・旧石器・縄文文化研究会
- ・草生水(くそうず・石油のこと)の会
- ・東アジアの中の古代日本研究会

## 【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1  
明治大学博物館 友の会宛  
メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp  
※博物館事務室に、友の会の担当者は常駐していません。  
連絡は必ずハガキまたはメールをお願いします。

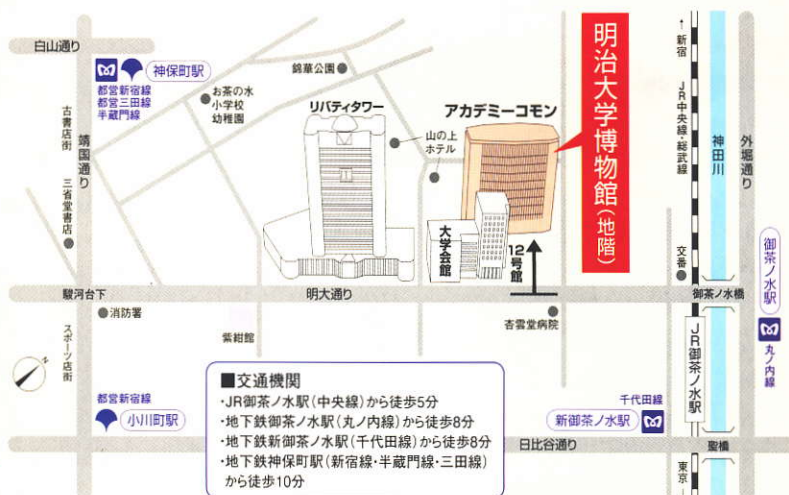
## 博物館案内

## 博物館案内

- ◆開館時間  
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日  
夏季休業日(8/10～8/16)  
冬季休業日(12/26～1/7)  
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料  
常設展無料。  
特別展は有料の場合があります。

## 図書室ご利用案内

- ◆開室時間  
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日  
日曜・祝日・大学が定める休日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



■交通機関  
・JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分  
・地下鉄御茶ノ水駅(丸の内線)から徒歩8分  
・地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分  
・地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分